

73 環境と共にある絵画とは

レオナルド《受胎告知》・ジョルジョーネ《カステルフランコ祭壇画》・カラヴァッジョ《聖マタイの召命》

2024

真鍋友範

1 絵画設置環境の重要性

通常、絵画を良い環境で鑑賞しようとする場合、美術館という、絵画にとって保存性や視認性などを総合的に演出した環境が与えられるだろう。

しかし、全ての作品がそのような良好な環境で鑑賞されているわけではない。

では、そのいくつかのケースの具体例を見よう。

2 《受胎告知》レオナルド・ダ・ヴィンチ



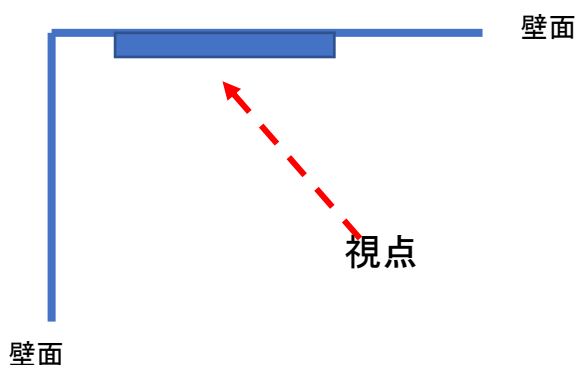
《受胎告知》レオナルド・ダ・ヴィンチ ウフィツィー美術館

このレオナルドの描いた作品図版を見て、即座に違和感を感じる人は、かなりデッサンに対する認識が鋭い人だ。

正面から見たこの図版では、マリアの右腕は骨折したかのように不自然だし、書見台はマリアから離れすぎている。また、マリアの背後の壁も、窓と石壁のラインが重なるように近接しすぎているように感じる。

しかし、この作品を実際にウフィッツィー美術館で見るときには、正しい位置から観衆が見ることができるような配慮がある。

現地ウフィッツィー美術館で作品を見る機会があれば、ぜひ確認していただきたい。



* 意図的に作品が隅に配置されている状況

3 《カステルフランコ祭壇画》 1503 ジョルジョーネ

ルネサンス・ヴェネチア派の画家ジョルジョーネが故郷カステルフランコの貴族の礼拝堂に納める祭壇画として描いたカステルフランコ祭壇画。

この作品由来は、カステルフランコの貴族が、病死した兵士であった息子の追悼画を、ジョルジョーネ工房に依頼したものであるという。

甲冑姿の息子の姿（聖人であるという説もあるようだ）が描かれているが、特徴なのは、顔は甲冑で覆われて、少し暗く不鮮明であることで追悼画を表し、対象の人物は、戦場での戦死ではないので、持っている旗竿が折れていない姿なのであろう。この作品は、祭壇画であると同時に追悼画でもあるのだ。

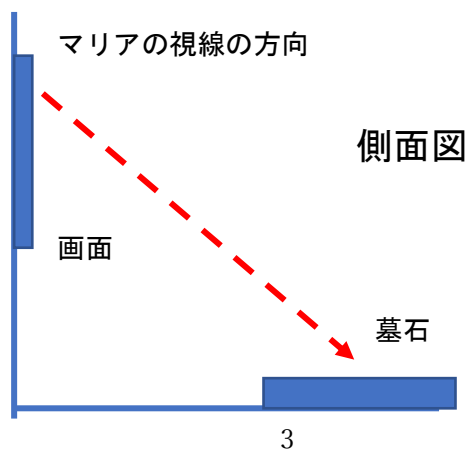
そして、より特徴である点は、中央の高い祭壇に座るマリアの視線である。

マリアは伏し目で、前方の床面を見ているのだ。さて、そこには何があるのか。

そこには、まさにその息子の墓石が設置されている。マリアはその墓石を悲しげに見ている。



《カステルフランコ祭壇画》1503 ジョルジョーネ



ここで判明するのは、ジョルジョーネは、設置環境を最大限取り込んだ空間構成を意識して、この祭壇画（追悼画）を描いたということだ。《カステルフランコ祭壇画》は、環境と絵画の融合した良い例なのだろう。

4 《聖マタイの召命》 1600 カラヴァッジョ



《聖マタイの召命》 1600 カラヴァッジョ

サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂 ローマ

この作品は、バロック初期のリアリズム絵画の開始を告げる記念碑的作品であったが、当時の美術史家が誤った作品解釈を行い、今でもイタリアでは中央のヒゲの男がマタイであると、ローマ・カトリック教会は 400 年間誤情報を世界に拡散している。

なぜそうなったのか。それは現地の展示環境が劣悪で、真正面から見れば読み取れる作品ストーリーが、読み取れない為なのだ。

下記の写真でわかるように、絵画内容がよく読み取れないのだ。しかも、この状態が400年以上変わっていない、

つまり、劣悪な展示環境が放置され、カラヴァッジョの描画意図が台無しにされた展示である。

《聖マタイの召命》は、1日も早い展示環境の改善が望まれるケースだ。



現地展示の様子

* 奥側の様子（重要な身体動作であるイエスの左手、右足が見えていない。）

* イエスの左手反応には質問受容の意味があり、右足移動には視点移動の意味がある。

絵画は、置かれた環境により、その内容が豊かになる場合もあり、一方で劣悪な環境では製作者の意図が活かされない故に、残念な結果になる、ということだ。

絵画の全てが美術館のような、正面から見ることのできる理想空間に置かれているわけではない。

正面からだとは正確にストーリーが読めるのに、斜め下から見ることを強いられ、正しく読み取れない最悪環境の例が、《聖マタイの召命》なのだ。

つまり、【世界中の人が、イエスは単純に指差したと誤解しているのだ。】